

第46回技術士全国大会（徳島）参加レポート（青年部）

報告者：島根県技術士会青年部 長島哲郎（情報工学）

先般、日本技術士会主催の第46回技術士全国大会が徳島県で開催されました。本年は2019年10月5日（土）～10月8日（火）の日程で開催され、本大会へ1名（木佐会長）、本大会・青年大会へ2名（嘉藤剛、長島哲郎）が参加しました。

本会イベント、青年イベントを含め、総勢570名の技術士が一堂に会し、大会テーマを「新たな世代（とき）へ、技術士の挑戦～四国・阿波からのメッセージ～」として、徳島県あわぎんホールを中心に、様々な分科会やイベントが執り行われました。個人的には昨年の福島の全国大会には行くことができず、島根県技術士会の青年としての年齢上限に達した今年、とりあえずの区切りと考えて参加をしました。



○テクニカルツアー

徳島県には全国的に有名な吉野川があります。吉野川は日本三大暴れ川の一つとして知られ、過去に何度も氾濫が繰り返されてきました。10月5日は吉野川の流域で青年大会のテクニカルツアーが開催され、現地へ赴いて防災などいろいろな話を伺うことができました。

最初に四国地方整備局 徳島河川国道事務所 池添副所長様より、吉野川第十堰にて話を伺いました。吉野川の河道や役割、被災経緯などを通じ、第十堰（10カ所目ではなく、地名が第十とのこと）が作られた経緯や現状の説明がありました。過去に第十堰の可動堰への改築計画が住民の反発により住民投票で中止となった経緯などを通じ、住民との相互のコミュニケーションの大切さなどを強く提起されました。



その後、地元名産の阿波藍による藍染め体験をしました。藍は吉野川の氾濫により稲作ができない代替として栽培が盛んになり、徳島を当時全国10番目の人口の都市に育てました。その後、化学染料が発達し、現状は5軒の藍製造所が残るのみとなっており、旧来の製法で作られた藍染めは流通している藍染めの1%程度しかないとのことでした。



次に、香川大学客員教授の松尾様より「吉野川の治水の歴史と防災風土資源及びローテク防災術」というテーマで話があり、第十堰やその住民投票、水害のリスクと調査などを通じた防災に対する考え方、高地蔵に秘められた先人の知恵、いざ我々の身の回りで災害が起こったときのローテク防災術などをお話いただきました。

ローテク防災術の実例として、南海トラフ地震かどうかの見分け方(1分以上揺れたら可能性が高い)、現場で台風の位置を知る方法(背中に風を受けて左前方45度)、さぐり棒の用意(浸水避難時に水中を探る棒)、雨量計や簡易スリッパの作成などをご紹介します。



○第4分科会 (青年)

翌日10月6日は朝から分科会が行われ、私は第4分科会(青年)に参加しました。今年のテーマは「楽しく充実した働き方へ、青年技術士の挑戦～ハラスメントや働き方改革の対応と実践～」と設定されました。

まず「ハラスメントへの対応」というテーマで坂田弁護士による基調講演があり、その後おなじみのグループワークが行われました。グループワークでは、組織に潜在するハラスメントの抽出～ハラスメント対策プロジェクトの立案～プロジェクトの報告～弁護士からの論評が行われました。四国の白鳥委員長を社長と見立て、チーム毎に社長へ発表をする形を取りましたが、しっかり準備ができ、プレゼン能力が高いチームは、聴衆からも高い評価を得ていました。



○最後に

移動の都合上、分科会の後に行われた大会式典と記念講演には参加できませんでしたが、テクニカルツアーや分科会活動を通じ、全国の技術士の方から多くの知見を得ることができました。技術者としての物の考え方や行動、コミュニケーションの取り方など、何度参加しても考えさせられる部分があり、今回も大変ためになる大会参加でした。来年は中部本部(名古屋)での開催とのことですが、着々と準備が進んでいる状況がプレゼンされ、否が応でも期待が膨らみます。成功裏に終わることを祈念して、今回の参加報告とさせていただきます。